二三男くんの未来日記

北区

それぞれのステージで自分らしく輝けるまちに

多様な人材が集まり育ち、魅力や価値を創出

70年前と変わらぬアーチ橋

「この橋は70年前とほとんど変わらないなあ」

王子駅から少し歩くと、クラシックなアーチ橋がかかっています。1930年、東京府によって石神井川にかけられた音無橋という橋です。石神井川は北区付近では音無川と呼ばれ、古くから春の桜、夏の滝浴み、秋の紅葉と行楽の名所、景勝の地でした。二三男くんは70年前もここを訪れたことがありました。当時は石神井川にかかっていた橋ですが、現在、川の本流は新たに造られた放水路を流れ、橋の下はせせらぎが流れる音無親水公園として整備されています。日本の都市公園100選にも選ばれ、今も昔と変わらず、お花見や水遊びで賑わう人々の憩いの場として親しまれています。

70年前とまち並みは変わりましたが、飛鳥山公園の前には路面電車が昔と変わらず、コトコトと走っています。

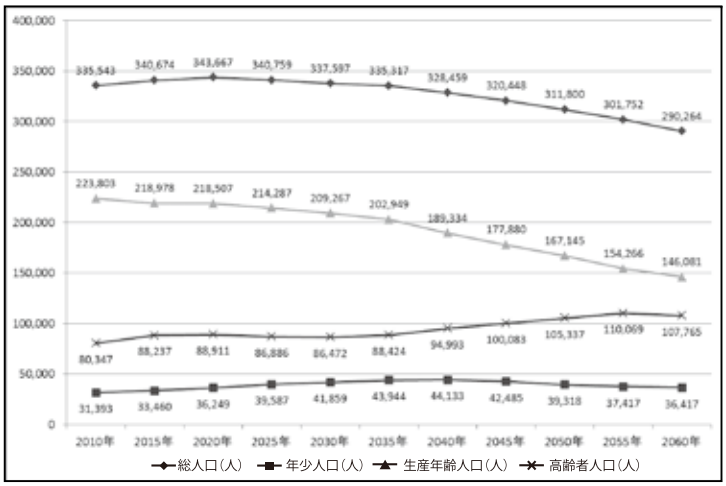
「新しいと懐かしいが共存するこのまちがどう変わってきて、これからどう発展しようとしているのか知りたい」

二三男くんは、音無橋を渡ってすぐ近くの北区役所に向かいました。

人口移動なしなら総人口30万人割れ

二三男くんは北区役所の区政資料室に向かい、窓口で「北区人口ビジョン（平成28年3月策定）」と「北区まち・ひと・しごと創生総合戦略（平成28年3月策定・平成29年3月改定）」を受け取り、最初に「人口ビジョン」を読みました。

北区独自の将来人口推計　（年齢不詳を含む）



北区の総人口（年齢不詳を除く）は1980（昭和55）年以降、減少傾向にあり、2000（平成12）年からは増加に転じているものの、年少人口・生産年齢人口の減少により、2010（平成22）年には33万1366人となりました。高齢者人口は増加を続けており、2010（平成22）年には7万9520人、高齢化率は24・0％まで上昇し、年齢構成のアンバランスな状態が続いています。

2004（平成16）年以降、社会増が自然減を上回る年があり、総人口を増加させる要因となっています。

国の長期ビジョンや国立社会保障・人口問題研究所の将来推計などを考慮した区独自の将来人口の推計

によると、２０３５（平成47）年から２０４０（平成52）年までに人口移動がゼロとなると仮定した場合、北区の人口は２０６０（平成72）年には29万２６４人まで減少し、30万人を下回る見込みです。

こうした分析を踏まえ、目指すべき将来の方向として、「生まれ・育ち・住んで良かったと思える『ふるさと北区』を実現し、首都東京の自治体として『30万都市・北区』を未来につなぐ」としました。

幸い、北区の人口はここ数年増加傾向にあり、昨年5月には25年ぶりに35万人を超えています。

「現在の転入超過を維持し、年齢構成のアンバランスな状態を是正するには、どうしたらいいんだろうか」

二三男くんは、その答えを探すため、『総合戦略』を読みました。

子育てするなら北区が一番

北区版総合戦略は基本方針として、（1）「生まれる」「つながる・ひろがる」「支える」きずなづくりを区民とともに推進、（2）「生まれ・育ち・住んで良かったと思える」北区の魅力や価値を創出・発信、（3）「まちの新陳代謝が活発化する」東京の北の拠点を構築、（4）「区民との良好なパートナーシップ」のもと、国・東京都・事業者との適切な連携・協力――の四つを掲げています。

出産前後の悩みや不安を軽減する産前産後セルフケア講座

その上で、総合戦略を構成する五つの政策分野を定め、政策分野ごとの5年後の基本目標を設定しました。

基本目標Ⅰは『子育てするなら北区が一番』をより実感できるようにする」です。

安心して妊娠・出産・子育てができるよう産前産後のサポート、保育ニーズに対応する保育所待機児童解消など、産前からの切れ目のない子育て支援を強化・推進するとともに、「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）」が実現できる環境整備の促進や、子育てファミリー層・若年層の定住化に向けた住宅の供給・住環境の整備・居住支援を行います。

例えば、出産前後の母親の心身の疲労や出産直後の悩み、育児不安等の軽減を図るため、「産前産後サポート事業」を行っています。このうち「産前産後セルフケア講座」では、区内の児童館を会場として、安定期以降の妊婦と生後１２０日までの乳児を持つ母親を対象としてエクササイズによる身体のケアや子育てに関する情報の提供、情報交換を実施しています。

「産後デイケア事業」では、出産後の母子へのケアや育児サポートをしている民間団体を支援しています。「産後ショートステイ事業」は、産後4カ月までの母子を対象として助産師のいる専門的な施設に宿泊し、心身のケアや育児のサポートを受けることにより、産後も安心して子育てができるように支援しています。

女性の活躍を応援する

基本目標Ⅱは『女性』・『若者』・『高齢者』の活躍を応援する」です。

国や東京都、ハローワーク等と連携しながら、多様な人材の就業・能力向上を支援するとともに、企業と女性・若者・高齢者とのマッチングの場を提供するなど、雇用の促進を図ります。また、高齢者が生涯元気

女性の再就職などを応援する「女性の活躍推進応援塾」

にいきがいを持って活躍できるまちづくりを推進します。

具体的な施策の一つに、「女性活躍推進事業」があります。女性のさらなる活躍を推進するため、女性の活躍推進応援塾として、基調講演会をはじめ、キャリアアップや起業、就労などに関するセミナーを開催しています。再就職準備セミナーや、中小企業経営者等向けのセミナー、育児休業中またはこれから出産・育児休業明けとなる女性を対象とした職場復帰準備セミナーもあります。

二三男くんは、「産前産後の悩みや育児の不安を軽減するだけでなく、出産後も安心して働き続けることができるのは、女性にとって頼もしいね」と感心しました。

北区まちなかゼミナール

基本目標Ⅲは『創造へのチャレンジ』によって、地域産業の活性化を図る」です。

区内中小企業の新製品・新技術の開発や大学との連携等、さらなる成長に向けた取り組みを支援します。また、創業支援施設の運営やセミナーの開催等を通じて、起業・創業を促進するとともに、商店街や個店の活性化など、地域産業の活性化を図ります。

例えば、多様な人材が集まっている北区らしい取り組みとして、「北区まちなかゼミナール」を開催しています。

北区内には十条や赤羽などに昔ながらの商店街がありますが、近年は大型店の進出やインターネット購買の普及で客足を奪われがちです。そこで、商店主が講師となり、各商店の専門知識や特性、ネットワークを活かして少人数のゼミナールを開催し、各商店の存在や特徴を知ってもらい、各商店や商店街のファンづくりを進めています。ご近所の人はもちろん、遠くからの買い物客がこれらの商店を好きになって、リピーターになってもらうのが狙いです。

２０１６（平成28）年からスタートし、年々、店舗と参加者が増えており、２０１８（平成30）年には86店舗が参加、延べ１５８５人が受講しました。参加者の満足度は97・８％と大好評です。「ソムリエが教えるワイン初級講座」「悪い姿勢とポッコリお腹！改善方法を学ぼう」など、身近な生活の話題や通好みの趣味の話題まで、多種多様な講座がそろっています。人気のある講座は、申し込み開始からすぐに満員に。参加費無料で、身近な生活の話題など関心が高いテーマであるのが、人気の秘訣のようです。

多種多様な講座がそろう「まちなかゼミナール」

担当者は「講座の受講をきっかけに地元のお店のことを知ってもらうことで、お得意様になってもらい、商店街のにぎわいを取り戻せたら」と話していました。

トップアスリートのまち・北区

基本目標Ⅳは「まちづくりの一層の推進を図り、北区の個性や魅力を発信する」です。

十条駅や王子駅を中心とした駅周辺のまちづくりとともに、木造住宅密集地域の整備事業等の防災まちづくりを推進します。また、北区が有する個性や魅力をシティプロモーションにより戦略的・効果的に発信するとともに、文化や観光を通じた新たな個性や魅力を発掘・創造します。

ここでは、後者の施策を紹介しましょう。北区には、トップレベル競技者の国際競技力の総合的な向上を図るトレーニング施設として、「味の素ナショナルトレーニングセンター（ＮＴＣ）」などがあります。そのため区では「トップアスリートのまち・北区」を打ち出しています。

西が丘地区からＪＲ赤羽駅及びＪＲ十条駅に通じる道路には「ＲＯＵＴＥ２０２０トレセン通り」という愛称を設定しました。通り沿いには愛称名のシンボルマークを用いた標識を10カ所設置。通りに隣接する

北区ゆかりのアスリートの手形を設置したモニュメント

区立稲付西山公園には、北区ゆかりのアスリートの手形を設置したモニュメントがあります。

また、日本トップレベルの指導者や選手から直接指導を受けるスポーツ教室を開催し、技術向上と東京２０２０大会開催の気運醸成を図っています。２０１７（平成29）年度には、スポーツボランティア制度を創設しました。東京２０２０大会に向けたボランティアニーズに応えるため、スポーツ現場のボランティア確保・育成に取り組んでいます。

二三男くんは「東京２０２０大会が終わった後もＮＴＣなどに愛着を感じ、スポーツが好きになり、ボランティア活動など、スポーツを通した社会貢献ができれば、それが何よりも区民にとってのレガシーになるだろうな」と思いました。

岩手県との連携・交流

基本目標Ⅴは「他自治体と共に発展できる取り組みを進める」です。

国や東京都、他区市町村との連携・協力を推進するとともに、首都東京の自治体として他自治体との友好関係を築き、相互発展や共存共栄を図ります。

具体的な取り組みとしては、岩手県との連携・交流を進めています。

２０１８年は、９月３日に「いわて食の商談会」を開催し、岩手県産の商品を扱う業者と北区の事業者とのマッチングが行われました。

10月23日から11月30日までは、「岩手・北区連携マルシェ２０１８岩手フェア」を開催しました。これは「特別区全国連携プロジェクト」の一環で、岩手県の食品生産者や販売者の都心での販路開拓を支援するとともに、メニュー開発を通じて区内事業者の売り上げ向上や顧客数増加につなげるのが目的です。

期間中、赤羽・十条・王子地区を中心とした参加店舗には同フェアのロゴマークが描かれたタペストリーが設置され、岩手県の豊かな自然や風土で育まれた食材や、それらを活用した新作メニューが期間限定で提供されました。

誰もが自分らしく輝けるまち

二三男くんは一通り勉強し、王子駅で電車を待っていました。ここは新幹線が走り、北陸や信州、新潟、東北、北海道など、様々な場所から訪れる人が行き来しています。それは新幹線がなかった70年前と変わっていません。北区は、東京の北の玄関口。昔から多様な人材が集まり、魅力と価値を創出してきました。

二三男くんは「北区は多様な人たちがそれぞれのステージで自分らしく輝くことのできるまちを目指しているのが分かった。北区には、古くからの商店街や、『トップアスリートのまち』を象徴するＮＴＣなど、区民が愛着を持つ様々な地域資源があり、それらを活用した事業展開を通じて様々な立場の区民が活躍している。特別区全国連携プロジェクトで培った岩手県との交流も、ウインウインの関係でまちの活性化に寄与している。若い子育て世代の定住化に向けて、今後もこれらの事業を展開していけば、これからも『30万都市』を守っていけるのではないか」と期待を抱きました。

電車に乗った二三男くんは、商店街で美味しいものを食べようと赤羽に向かいました。

取材協力／北区